

# 瑞雲

## 独り洛中に在りて重陽に逢う 慊慊帰を思うて故郷を恋わん

心地良い季節になった。庭には金木犀の香りが漂っている。月もきれいだ。秋風蕭瑟天気涼と詠んだ詩人もいる。(それは私である)

この節になると、たつた一度だけ経験したさびしいとも、やるせないとも、何とも形容し難い孤独な秋を思い出す。

当時私は十九才、初めて親元を離れて京都に遊学、不眠症に悩まされていた。

大半の友人は東京に出るか地元に残り、箱根の関を越えて遠く「異郷」に在るのは私一人だった。(高校の教頭に「東北人が箱根の関を越えて関西に行くのは賛成出来ない」と言われた半世紀も前のことである。)

下宿は京の西の外れの太秦、しかも老婆独り暮らしの離れを借りたので日常の会話もほとんど無かった。

そんな私を氣遣つて友人達はよく手紙をくれた。二ヶ月の間に二十二通もよこした友もいれば、「アルバイトばかりで授業にでないのどうせ落第だ。この時間はお前に手紙を書くことにした」との書き出しでフランス語のテスト用紙の裏表にびっしり書いてよこした友もいる。

九月九日山東の兄弟を憶う

独在異郷為異客

每逢佳节倍思親

遙知兄弟登高処

遍挿茱萸少一人

誰でも知っている王維の詩である。

旧暦九月九日は陽の数である九が二つ重なるので重陽の節句と言われる。

この詩をみると私はあの時の自分を思い出す。

独り洛中に在りて重陽に逢う

慊慊帰を思うて故郷を恋わん

嬉しいこともあった。友人が一人山陰の兄弟を訪ねる途中立ち寄ってくれた。恩師のひとりも修学旅行の引率の時誘い出してくれた。

久早に甘雨に逢う

(長い日照りの後の恵の雨)

他郷に故知と逢う

(遠い異國で旧知に出合ったとき)

そのうれしさは筆舌に尽くしがたいと古人は伝える。

虚しく征きて実ちて帰る

弘法大師空海が日本に帰着して太宰府の海に向かつてつぶやいた言葉だという。

若者が故郷を出て見知らぬ土地へ行く。

不安で仕方なく、言葉も異なり生活習慣も知らない。独り闇を手探りで歩くような日々。

しかし「虚しく征く」の不安と孤独と焦燥が人間を成長させるのに不可欠なのだ。

無名の僧であった空海が「虚しさ」に耐えた結果、今、密教をただ一人伝授されて故国の地に立つ。

この「虚しく」こそが大事で

「実ちて帰る」はどうでも良い。「実ちて帰る」は結果にすぎない。

順境は春の如し出遊して花を観る

逆境は冬の如し堅く臥して雪を見る

春はもとより楽しむべし

冬もまた楽しむべし

ひと秋の間に直面した数々の物事は自分にとっては全てが肥やしであった。

もつともそれが解かったのはずっと後のことではあるが……